「何を学ぶか」と「どのように学ぶか」の先で「何が身に付いたか」の検証
～「何ができるようになるか」に着目した授業改善を通して～

北海道白糠養護学校　教諭　吉田　遼太郎

１　主題設定の理由

これまで本校では平成30年から「『主体的・対話的で深い学び』の授業づくり」、令和２年から「育成を目指す資質・能力を身に付けるための、教科等横断的な視点に立った授業づくり」をテーマに児童生徒の学びの「方法」と「内容」を研究してきた。

「内容」と「方法」を工夫した実践を重ねる中で、その結果の検証が必要と考えた。そのため、目標と評価へ着目した授業づくりに取り組むこととした。また、職員へのアンケートや校長より示された学校経営方針から、授業での実践を中心に取り組みたい旨が挙げられたため、授業改善を主軸に「適切に設定された目標に着目した授業改善を行うことで、児童生徒に育成したい資質・能力を着実に身に付けさせることができるであろう」という仮説を立て、検証を進めることとした。

２　内容

１）これまでの校内研究の取り組み

①何を学ぶか（内容）

本校で作成、活用している学習指導要領のチェック表を用いて、児童生徒がこれまで学んできたこと、現在取り組んでいること、これから取り組んで行くことを共有した。また、将来必要と考える力（資質・能力）について、各教科等の「見方・考え方」を働かせながら様々な場面でその育成を図ることとした。

②どのように学ぶか（方法）

「主体的・対話的で深い学び」が実現されたとき、児童生徒にどのような姿が見られるか（表１）に着目して学習過程を工夫した。

主体的な学び	○興味・関心を高める ○見通しをもつ ○自分と結びつける ○振り返って自覚する
対話的な学び	○多様な情報を収集する ○多様な手段で表現する ○共に課題を解決する ○共に考えを創り上げる
深い学び	○課題を発見する ○解決の方向性を見いだす ○思考し解決に向かう ○知識を活用する ○知識を習得する ○知識を構造化する

表１　各学び実現時の児童生徒の姿

２）主題の文言の整理

「何ができるようになるか」＝「育成を目指す資質・能力」＝「目標」であること、「何が身に付いたか」＝「授業中や終了時の児童生徒の変容、姿」＝「評価」であること、この「目標」と「評価」のつながりから、授業終了時に目標が達成されたか振り返ることで「何が身に付いたか」を確認することになると考えた。

３）各教科と自立活動

各教科と自立活動では目標や内容を設定するまでの過程に大きな違いがある。各教科では学習指導要領の各段階のどこに位置しているのかで、目標が設定される。対して、自立活動では児童生徒の実態により導き出される課題から目標が設定される。

４）授業改善の実践

これまで授業後には３観点（知・思・主）から児童生徒の様子を記録して振り返っていた。しかしながら、必ずしも目標に沿って記載しているわけではなかった。そこで、授業の記録用紙に付け足して、本時の目標に対する３段階の評価、設定した目標が児童生徒にとって妥当であったか検討すること、その上で手立て等を検討するよう授業改善の仕方を整理した。

３　実践

１）理論的な部分の研究

「何を学ぶか」と「どのように学ぶか」については、過去のまとめ等を提示しながら全職員で内容を共有した。

２）児童生徒の実態と将来の目指す姿について共有

教育支援計画、個別の指導計画、学習指導要領のチェック表を活用して将来の姿から必要であると考えられる力、関連する実態、現在身に付けるべき力を明確にしながら共有した。

３）授業改善の実践

目標の設定をしてから、手立ての検討⇒授業の実施⇒目標が妥当であったかの検討⇒検討した目標を基に手立ての検討、という流れをサイクルとして、各授業グループで授業の改善に取り組んだ。また、手立ての検討の際、「主体的・対話的で深い学び」の視点から指導を考えることも取り組んだ。

４　まとめ

１）成果と課題

各学部で今年度の取り組みについて成果と課題に分けて話し合った。

①成果

授業の記録用紙を使うことで目標について今までより考えるようになったこと、目標の

見直しがあることでぶれが少なく手立ての見直しの際の視点もはっきりしたこと、授業記録用紙が目標をより意識しやすい様式だったため授業毎に目標について常に振り返ることができたこと、目標を達成するための手立ての工夫が多くなされ目標達成に繋がったことが挙げられた。
②課題
　過去の取り組みをもっと丁寧に扱うべきだったこと（主に「主体的・対話的で深い学び」について）、そのため手立ての工夫について深め足りなかったこと、教育支援計画を用いて目指したい子どもの姿を共有したが、各教科で年間を通して目指したい子どもの姿が共有されないままスタートしたことが挙げられた。

２）授業改善
　１時間、単元、１年間それぞれの単位での取り組みがどのように繋がったのか、教育支援計画や個別の指導計画と照らし合わせながら検証した。
①１時間単位
　評価の際の視点がはっきりしてぶれなかったこと、目標をその都度見直したことで１時間毎の達成度合いが明確になった。

②単元単位
　１時間毎に目標が妥当か見直す手順を踏むことで、単元の目標達成に近づくことができた。

③１年間
　各授業の担当者からの話で、日々の授業や単元の積み重ねが、それぞれの目指したい姿へ近づくことができた。

３）仮説の検証
　目標を見直して適切な目標が設定された上で、手立て等を工夫する授業改善を行うことは、児童生徒へ身に付けさせたい力を育むことに繋がっていたものの、年度初めに各教科で目指す姿（ゴール）を確認する必要があった。

４）全体
　中学部、高等部ともに「目標に着目した授業改善は、生徒へ育成したい資質・能力を身に付けさせることに繋がっていた」とまとめられたことから仮説は検証された。
　今年度の取り組みから、
①教育支援計画にも記載される「将来の姿」と「そこを目指すために必要な力」を共有する。（本人・保護者の将来の希望、長期・短期の目標）
②①で共有した必要な力を各授業でどのように育成していくのか、年間指導計画を作成した後、共有する。（年間指導計画）
③単元計画と毎日の授業において、目標が妥当か、ぶれていないか確認する（授業記録用紙）
④妥当か検討した目標を達成するための手立てを工夫する。その際、「主体的・対話的で深い学び」の視点から手立てを考える。
　という手順を踏むことで、児童生徒へ育成したい資質・能力を身に付けることに繋がっていくことがわかった。さらに、③と④の中で単元計画を見直すことも必要である。

（参考文献）
文部科学省（2018）特別支援学校学習指導要領解説　各教科等編（小学部・中学部）開隆堂
文部科学省（2019）特別支援学校高等部学習指導要領
田村学（2018）深い学び　東洋館出版社
奈須正裕（2017）「資質・能力」と学びのメカニズム　東洋館出版社